

雨粒をつたって



twitterに掲載した小さな詩たち。

橘 ひろ代
@hanani_somuite

いろいろ考えていると
だんだん何も言えなくなって
ようやく出てきた言葉は
誤解されるほどにシンプルだったりする

まだ幼い言葉たち

迷子になっても悲しまないでね
いつかきっと
誰かの心に届くから

甘いものには、痛みが伴う。

甘い砂糖は虫歯をつくり、
甘いお酒は頭が痛い。

甘い恋にはその同量だけ、
痛みと苦みがふくまれている。

甘ければ甘いほど、それは。

華やかなことは
花にはかなわない

爽やかなことは
風にはかなわない

でも私が私であるということは

私にかなう ものはない

音も立てず

くるしんでいる人がいたのなら

どうかその人に

美しい幸運が音もなく

たくさんふりそそぎますように

人のこころは変わっていくから

昨日とちがっても悲しまないで

明日のじぶんをおそれないで

どうしてあの時、涙を見せたりしたの。

あの涙さえなければ、

繋ぎ止められることもなくお互いに自由だったのに。

わたしはこころがせまいし、
愛もあさい。

だからこそ、
愛にあこがれるのだろうな。

えいえんにたどりつけなくても、
とおくの星に、
いのりつづけるのだろうな。

真実が欲しいわけじゃなかったんだ、

ということもまた、

真実。

人一人の世界など、

天の美しさのまにまに、

委ねてしまえばいい。

あなたがこの世に生きている

そのことだけで

私のよろこび

自分を偽る強がりよりも、

手放しの弱さが、

好きだよ。

満ちたり、
欠けたり、
ほんと人生みたいだね。

月が地球を見守っていることにも、
素敵な意味があるように、
思えてならないんだ。

隣に君がいることに、
僕が素敵な意味を見いだすように。

叫びたくても、ひとり。

それでも。

コノキモチに

アノトキ気づけていたなら

それでもイマには

イミがあるよね

気持ちは

言葉より

色々だから

名付けないまま

この気持ちに

さよなら

私が失うんじゃない。

彼が失ったのよ。

どうしたらこの暗闇から抜け出せるのだろう。

そう考えながら膝を抱えて座っている。

これでは変わるはずがないと思いながらも、
紙飛行機に思いを込めて、
かすかな光へ向かって飛ばすことしかできない。

大空を翔べ、私の光。

そして私に伝えておくれ、
素敵な空の輝きを。

いつも、どれだけ無意識だったか、

思い知って、晴れ晴れ。

遠くに見える幸せそうなものより、
近くにある幸せを愛してみようよ。

小さくても確かなものを。

それを積み上げていけば、
その“遠く”にも手が届くようになるかもしれないよ。

あの大きな打ち上げ花火だって、
ほんの小さな火薬たちが集まって、
空高く飛べるようになったのだから。

贈り物は受け取った。

だから、縁がなくなった。

それだけのこと。

だからこそ、次へ進める。

いま気になるとすればそれは、

私はあなたに、

何をあげられたかな、

ということ。

私が誰かの脇役でられないように、
誰も、
私の脇役ではられない。

どんなに好き合ってもそれは、
君が主人公の物語と、
私が主人公の物語が、
ひととき交錯するにすぎないの。

だからこそ、
大切だし、
だからこそ、
人はひとりだね。

急に知らない人に思えるときがあるよ。

目の前の君が、

突然いなくなったみたいな気がして、

とてもこわい。

でもきっと、

君は何も変わっていないくて、

僕の中の何かが、

君をとらえ損ねているのだろう。

それが果たして何なのか、

僕は知らなければならない。

私が選ばなかった人生を
あなたが歩いてくれている

私が選べなかった人生を
あなたが歩いてくれている

こんにちは
さようなら
ありがとう

こわい こわいを

にぎってる

その手に ボクの

すき すきを

恋の苦しみほど、甘美な苦しみはないね。

でも、愛の苦しみは、重いよ。

自分への愛でも、
誰かへの愛でも。

それでも変わらずに愛せるのが、
本当だよ。

苦しい時に手を離さない、
それがたぶん、
愛なんだよ。

ただし、

今いるここを、

お花で一杯にしてから、

それからだよ。

あの灯台は、

あの日の決意。

あじさいが咲いていた。

あちらは青、
こちらはむらさき。

僕は今、何色だろう。

僕はあす、何色になろう。

永遠のことに思いを馳せると、
気が滅入りそうになるから、
僕は限りあるようにものを見る。

例えば、
あと5分で君の不機嫌は終わるだろう、とか。

静けさ という音

私は今、
静かな雨音の中に住んでいます。

雨粒をつたって、
どこまでも高く登れそうない気分です。

あなたも今、
この雨音を聞いていますか。

過ぎゆくものだけが、美しい。

偶然買った文庫に、
偶然挟まっていた葉。

私の心が求めていた、
目が覚めるような答えがそこにはあった。

まるで天使が葉を忍ばせ、
私を導いたかのように。

行くべき道が、照らされた。
間違いようもないほど、輝いて。

空はこんなに青いのに、
僕はまた心を閉ざしてしまった。

白い雲は僕を見て、
しょうがないやつだなと、
きっと笑ってくれるだろう。

次はきっと。
次こそきっと。

あなたに隠れて、そっと傷つく。

私が紡ぐ言葉の中に、

私は住んでいるのだから。

楽しんでしまえば、きっと楽になれるよ。

つらい思いを伝えたい、

けれども悲しませたくはない。

この葛藤はそう簡単には、

なくなってくれそうもない。

誰にでもあることだよ。

でも、誰にでも感じられるわけじゃない。

それが感じられるということだけで君は、

ひとつ、

恵まれているんだよ。

「アイドルなんて、手が届かないだろ、好きになっても無駄じゃない？」

「みんな、愛の発散をしてるのよ」

「へえ、愛って、ストレスみたいに溜め込むとよくないんだ？」

新月の夜だから、

余計人恋しくなるのかな。

月のない暗闇にひとりたたずむのは、

今の僕には辛すぎるから。

星々は誰のもとにも輝き

かつ私だけのために輝く

無限から生まれた有限
永遠から生まれた刹那
この世に生まれいずるもの全て
そうした存在なのかもしれない

それはつまり
私達は無限の一部であり
永遠の一部であるということなのだろう

同時に
私達の中に無限があり
永遠がある

別のもではない
一体のもの

私の心にいつも影をおとしている

その正体がどこにあるのか

いまだ見出すことができない

それでも

その影があるからこそ

しあわせが浮き彫りにされるのだと思えば

それもまた

愛と呼ぶのかもしれない

僕が奪われたくないものを簡単に奪えるほど、

僕は無神経でも、強くもないよ...

伝えられないまま飲み込んだ言葉は、
心の肥やしになるのかな。

それとも毒になるのかな。

外は雨。

蛙の声。

君の言葉は届かない。

私の言葉も届かない。

虚しい時も嬉しい時もつづけよう。

無駄でも恥でもつづけよう。

それが何かを成しても、

もしかしたら成さなくても。

つづけることがひとつ。

それだけで、ひとつ。